

平成 30 年 6 月 16 日現在

機関番号：13501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2017

課題番号：17H06719

研究課題名(和文) 育児中の夫婦が抱く虐待不安の様相：夫婦関係に着目して

研究課題名(英文) Abuse Anxiety held by Fathers and Mothers: Focusing on Marital Satisfaction.

研究代表者

渡邊 菜奈美 (WATANABE, Manami)

山梨大学・大学院総合研究部・講師

研究者番号：60802874

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、夫婦が抱く虐待不安の程度や背景の違いを明らかにすることである。そのため、2～3歳児を育児中の夫婦27組を対象に、質問紙調査と面接調査を実施した。まず、質問紙調査の結果、虐待自己評価不安、虐待他者評価不安ともに妻の方が高く、夫は虐待自己評価不安と夫婦関係満足との間に、妻は虐待自己評価不安と自分の家事・育児参加との間に負の相関を示した。続いて、夫婦関係満足に着目し抽出した2組の夫婦の面接調査から、育児や家族関係の認知的処理の夫婦間での違い、および夫婦の育児への物理的な参加というよりも情緒的な交流の重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate the degree and relative variables of abuse anxiety held by fathers and mothers parenting 24-36 months old children. Survey and semi-structured interviews were conducted with 27 pairs of father and mother. First, the results from surveys showed followings: (1) mothers held abuse anxiety higher than fathers, (2) fathers' abuse anxiety was related to fathers' marital satisfaction, while mothers' abuse anxiety was related to mothers' taking part in household and parenting. Next, the results from interviews suggested that there was difference between fathers and mothers about cognitive strategies on parenting and family relationship, and that emotional communication was more important than physical cooperation. It is necessary to study the dynamism and difference between fathers and mothers about abuse anxiety through larger sample size and various families.

研究分野：子ども学

キーワード：虐待不安 育児不安 夫婦関係 質問紙調査 面接調査

## 1. 研究開始当初の背景

近年、「泣き声通告」の義務化等により、社会全体で「子ども虐待」への意識が高まっている（厚生労働省，2016）。このような状況は、虐待の早期発見を促すと考えられているが、同時に、育児中の母親にとっては「虐待しているのではないか」、「子どもを虐待する母親として責められるのではないか」といった「虐待不安」を増加させていることも指摘されている（大澤，2005）。虐待不安とは「育児の中で感じられる不安のうち虐待に対する漠然とした不安や恐れを伴う状態」と定義され（庄司，2003）、育児不安の中でも深刻な不安を総称したものと考えられている（田中，2010）。特に、虐待不安と育児効力感に負の、虐待不安と虐待傾向に正の関連があることがわかっているため（渡邊，2015）、虐待不安の低減に向けた支援を提案する必要がある。

ただし、従来の虐待不安に関する研究は、次の2つの理由から、母親のみを対象としてきた。ひとつが、日本における父親の育児参加がまだ発展途上であり、現実には、父親はいるが、実際の育児には参加しないという日本特有の育児環境がいまだにあると指摘されていること（柏木，2008）、もうひとつが、子ども虐待の加害者の9割が実母であること（厚生労働省，2014）である。

一方で、わが国における夫婦共働き家庭は47.6%（総務省統計局，2017）にもおぼろげに、「イクメン」の流行が表すように、父親の育児参加への期待が大きくなっている。実際、父親研究も盛んになってきており、少ないながらも、これまでの研究では、父親になることによる発達（森下，2006）や、父親が育児参加することによる自身のwell-beingへの影響（朴ら，2011）、父親の子どもの発達への影響（岐部，2016）などが検討されてきた。特に本研究で扱うような育児不安をはじめとした育児の諸側面は夫婦の関係の在り方と密接に関連することも示されている（柏木，2008）。ゆえに、今後の研究においては、父親も含め、夫婦を対象とした検討を行うことが望ましい。

夫婦を対象とした時、育児従事時間を始めとした育児へのかかわり方は夫婦間で異なることが多くの研究で指摘されている（e.g., 佐藤，2015）。そうすると、必然的に、それぞれが育児中に抱く虐待不安の内容やその背景も異なることが予想される。また、上記のように、育児の諸側面は夫婦関係の在り方とも密接に関連しているため、夫婦の関係性の在り方等によって、虐待不安の内容やその背景が異なると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、育児中の夫婦が抱く虐待不安の程度と、その背後にある状況や心的状態を明らかにすることである。その際、育児不安に関する研究は、調査対象者による違い

を考慮するため面接調査の必要性が謳われていることから（坂井，2010）、夫婦それぞれの主観からボトムアップに捉える必要があると考える。よって、育児中の夫婦を対象に、事前に行う質問紙調査を基礎資料として面接調査を実施し、以下の2つの視点から語りを分析する。

まず、夫婦がそれぞれ抱く虐待不安の程度および背景はどのように異なるのかという視点である。つまり、質問紙調査の結果から虐待不安の程度やそれを取りまく変数間の関連性を夫婦間で比較した上で、夫婦それぞれが語った「虐待不安」エピソードを分析することにより、夫婦間の虐待不安の程度やその背景の違いを明らかにする。

もうひとつが、夫婦の関係性と虐待不安はどのように関連するのかという視点である。特に、これまでの研究では夫婦の情緒的な交流が育児不安に強く影響を与えていることが示唆されてきたため（e.g., 住田・中田，1999）、本研究では、質問紙調査で得る夫婦関係満足に着目して事例を抽出し、虐待不安への影響の検討を行う。

これらの検討を通して、母親だけではなく、父親の虐待に至り得る苦悩や困難に関する知見を提供できる上に、夫婦の関係性に対応した育児支援の提案も可能となる。さらに、父親の育児参加が期待されている現代において、つい母親にばかり行きがちであった支援の目を、夫婦両方に向けさせることにもつながるだろう。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究参加者

2017年12月に関東近郊の保育園および幼稚園4園で24ヶ月以上36ヶ月未満児の保護者にチラシを配布し、夫婦での面接調査への協力を表明した夫婦、および機縁法で収集した夫婦計27組を対象とした。ただし、そのうち1組は協力表明時に子どもが対象月齢であったが、調査時には37ヶ月となっていたため、分析の対象から除外することとした。参加者の平均年齢は夫が37.58±4.58歳、妻が35.50±4.03歳であった。なお、本研究で24ヶ月以上36ヶ月未満児の保護者を対象とした理由は、この時期が子どもの第一反抗期にあたり、養育者が否定的な感情を抱きやすいと指摘されているからである（高濱ら，2008）。

### (2) 手続き

子どもが24ヶ月以上36ヶ月未満を対象とし、まずはWebにて夫婦別々に質問紙調査を実施し、育児状況をよく把握した上で、それぞれに半構造化面接を行った。詳細は下記の通りであった。

### (3) 質問紙調査

質問紙は、以下の内容から構成された。

#### 父親（夫）用

基本属性 父親の年齢、職業の有無、世帯年収（～150万円 / ～350万円 / ～550万円 /

～700万円 / ～1000万円 / 1000万円～), 最終学歴(中卒 / 高卒 / 専門学校卒 / 短大卒 / 大卒 / 院卒)を確認した。

夫婦関係満足(諸井, 1996) 「私たちは、申し分のない結婚生活を送っている」など計6項目から構成され、得点の高さが夫婦関係満足の高さを意味する( $r = .94$ )。

子どもの特徴に関わる Parenting Stress Index(奈良間ら, 1999) 「私の子どもは、他の子どもよりずっと泣きやすく、むずがりやすい」など計38項目から構成され、得点の高さが子どもの扱いにくさを意味する( $r = .87$ )。

家事・育児参加(本保・八重樫, 2003) 「妻の子育ての心配を聞く」など計16項目から構成され、得点の高さが家事や育児への参加度の高さを意味する( $r = .83$ )。

妻の家事・育児参加 上記の尺度を妻用に改変したもので、「あなたの子育ての心配を聞く」など計16項目から構成され、得点の高さが妻の家事や育児への参加度の高さへの認識を意味する( $r = .74$ )。

虐待傾向養育態度尺度(花田・小西, 2003) 「感情的に叱ることはない」など計15項目から構成される。本尺度は回答のしにくさ等を考慮してすべて逆転項目となっているため、逆転処理をしてから分析を行った( $r = .82$ )。

育児不安(牧野, 1982) 「自分一人で子どもを育てているのだという強迫感を感じてしまう」など計14項目から構成され、得点の高さが育児不安の高さを意味する( $r = .64$ )。

虐待不安(渡邊, 2015) 「いずれ自分も子どもにひどく暴力をふるってしまうのではないかと思う」など計9項目から成る虐待自己評価不安と、「子どもが泣くと、周りの人から、自分が何かしているのではないかと思われたら心配になる」など計8項目から成る虐待他者評価不安から構成され、得点の高さが各虐待不安の高さを意味する(虐待自己評価不安  $r = .91$ , 虐待他者評価不安  $r = .96$ )。

#### 母親(妻)用

基本属性 母親の年齢, 職業の有無, 家族形態(核家族 / 拡大家族 / その他), 最終学歴(中卒 / 高卒 / 専門学校卒 / 短大卒 / 大卒 / 院卒), 結婚年数, 子どもの年齢および性別を確認した。

他は夫と同様であった。それぞれの信頼性係数は、夫婦関係満足( $r = .87$ ), 子どもの特徴に関わる Parenting Stress Index( $r = .87$ ), 家事・育児参加( $r = .48$ ), 夫の家事・育児参加( $r = .77$ ), 虐待傾向養育態度尺度( $r = .33$ ), 育児不安( $r = .62$ ), 虐待自己評価不安( $r = .86$ ), 虐待他者評価不安( $r = .94$ )だった。

すべて4件法で回答を求め、統計的手続きには IBM SPSS Statistics 25 を用いた。

#### (4) 半構造化面接

参加者の指定した公共の場所もしくは参加者の自宅にて、夫 13分～105分、妻 30～75分の半構造化面接を実施した。互いの声が聞こえないよう配慮し、夫婦別々に同様の調査を行った。調査開始前に本研究の目的や個人情報保護等に関して説明を十分にを行い、録音や結果の公表についての同意を得た上で、内容を全て録音し逐語録を作成した。

この半構造化面接では、面接に先だて行った質問紙調査の中で虐待不安のうち、1項目でも2点以上を付した夫婦にはその理由を質問した。虐待不安への回答は、平均値が夫の虐待自己評価不安  $1.48 \pm 0.61$  点、虐待他者評価不安  $1.29 \pm 0.51$  点、妻の虐待自己評価不安  $1.85 \pm 0.51$  点、虐待他者評価不安  $1.61 \pm 0.66$  点であり、このように平均値が極端に低い中でも「1. 全くあてはまらない」以外の得点を付した夫婦には着目し、直接的にその理由等を問う必要があると考えたからである。その結果、5名の夫は虐待不安項目に1点を付していたため、面接の中で虐待不安に関する直接的な質問項目を設定しなかった。その他の詳しい質問内容は、紙面の都合上、省略する。

#### (5) 分析方法

本研究では、2つの視点から分析対象を抽出し、事例的に検討した。1点目に、夫婦間の虐待不安の程度および背景の比較を行うため、質問紙調査の結果から各虐待不安の平均得点の夫婦間差に着目した。そして2点目に、夫婦の関係性による虐待不安への影響を検討するため、質問紙調査の結果から夫婦関係満足の平均得点の夫婦間差にも着目した。これらを踏まえて、本論文では、以下の2組の夫婦を事例として抽出した。

具体的には、1組目が、各虐待不安の平均得点は妻の方が高く、夫婦関係満足の平均得点は夫の方が高い ID 13 だった。ID 13 は、特に、夫は質問紙調査において、各虐待不安についてはすべての項目で最低得点である1点、夫婦関係満足についてはすべての項目で最高得点である4点を付していたのに対し、妻は各虐待不安については両方とも本研究参加者の妻の中で最高点(虐待自己評価不安 3.44 点、虐待他者評価不安 3.25 点)を付していたという点で特徴的な得点構造を示していた。2組目が、各虐待不安の平均得点が夫の方が妻よりも高く、夫婦関係満足の平均得点が夫婦間で差のない ID 4 だった。ID 4 は、夫婦関係満足については、その平均値は全参加者の平均値と比べ夫婦ともに同程度低い(夫婦ともに 2.00 点)という点で特徴的な得点構造を示していた。

本論文では、以上2組の夫婦の語りを事例的に記述することによって、虐待不安の夫婦間比較および夫婦の関係性による影響の検討を行った。なお、研究成果における語りの引用(「」内)の中でも、太字が虐待不安に該当することを意味する。

#### (6) 倫理的配慮

本研究に関わるすべての文書は事前に山梨大学倫理専門委員の承認を得ている。参加者には調査開始前に研究の調査内容および調査協力の任意性について十分に説明を行い、同意を得た上で調査を実施した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 各変数間の関連

夫は、夫婦関係満足とパートナーの家事・育児参加 ( $r=.63$ )、子どもの特徴と虐待傾向・養育態度 ( $r=.50$ ) に正の、夫婦関係満足と育児不安 ( $r=-.47$ )、パートナーの家事・育児参加と育児不安 ( $r=-.42$ ) に負の相関が示された。妻は、夫婦関係満足とパートナーの家事・育児参加 ( $r=.44$ )、子どもの特徴と育児不安 ( $r=.46$ )、自分の家事・育児参加とパートナーの家事・育児参加 ( $r=.46$ ) に正の、パートナーの家事・育児参加と虐待傾向・養育態度 ( $r=-.40$ ) に負の相関が示された。

また、虐待不安については、夫婦ともに不安間で強い相関が示された (夫  $r=.77$ , 妻  $r=.60$ , いずれも  $p<.01$ )。よって、今後の分析では互いの影響を統制した上で分析を行う必要があるだろう。

##### (2) 夫婦間の比較: 質問紙調査の結果から

各変数について夫婦間で差があるかを検討するため、 $t$  検定を行った。その結果、妻の家事・育児参加に関する夫の得点と妻の得点間に 1%水準の有意差 ( $t=3.46$ )、育児不安 ( $t=-2.18$ )、虐待自己評価不安 ( $t=-2.51$ )、虐待他者評価不安 ( $t=-2.65$ ) に夫婦間で 5%水準の有意差が示された。具体的には、妻の家事・育児参加については夫の方が妻よりも得点が高く、育児不安、各虐待不安については妻の方が夫よりも得点が高かった。

また、各変数について夫婦間の相関分析を行った。その結果、夫婦関係満足 ( $r=.54$ )、自分 (夫) の家事・育児参加 ( $r=.63$ )、そして虐待他者評価不安 ( $r=.46$ ) に有意な正の相関が示された。つまり、これらの変数については、夫婦間で認識が共有されている可能性を意味する。

続いて、夫婦間で各虐待不安と他変数との関連性に違いがあるかを検討するため、それぞれについて各虐待不安と他変数との相関分析を行った。分析においては、片方の虐待不安を統制した偏相関係数を算出した。その結果、夫は夫婦関係満足と虐待自己評価不安との間に有意な負の相関を示したのに対し ( $r=-.12$ )、妻は自分の家事・育児参加と虐待自己評価不安との間に有意な負の相関を示した ( $r=-.46$ )。つまり、夫は夫婦関係満足が低い人が、妻は自分の家事・育児参加が低い人が、虐待自己評価不安を高く抱えていることを意味する。夫婦間相関から夫婦関係満足については夫婦ともに同様の得点を付していることが示されたにもかかわらず、夫のみが虐待自己評価不安との関連を示したという点については興味深い。また、妻の家事・育児参加については夫の方が過大 (妻の

方が過小) 評価している可能性が示されたが、妻自身が家事や育児に参加していないと感じているとき、「虐待しているのではないか」などと不安を感じる状況は、育児全般について自信を欠如している状況だと考えられる。虐待自己評価不安は育児効力感と負の関連が示されているため (渡邊, 2015), 妥当な結果だったといえる。

##### (3) 面接調査の結果から

虐待不安の夫婦間比較および夫婦の関係性による影響の検討を行うため、先述した方法で抽出した 2 組の夫婦について事例的に検討した。ただし、本紙では紙面の都合上、語りを一部紹介するにとどめ、語りから得られた知見を中心的に報告する。

ID 13 の語り まず夫婦関係満足についてだが、夫はその行動的・認知的な対処方略が回避的であるため、顕在化された満足得点は高めであったと考えられる。例えば、妻に関して「不満はあるけど、ない。言ってもキリがないから、ないと思ってますね。それはお互いあると思ってるから。我慢するってわけじゃないけど、変えられるのは自分と未来だけだと思ってるから。他人がどうこうってのは、一応、嫁さんだけ他人じゃないですか。別に望んだりとかはしないようにしてますね。不満があっても、それは不満って思っちゃうと不満になっちゃうから。気にしてないっていうか、気にしてないようにしてるっていうか」と述べ、育児についても「嫁さんが決めたやつは全部やってますね。僕の意見はあんまないかな。任せてるっていうか。言っても変わらないからね、なんも。もう (妻が) 決めちゃってるから、『いいよ』って言うしかない」と妻主導であることを述べ、「だから〇〇 (趣味) してるのかもしれない」と、「気にしてないようにしてる」ために趣味に傾倒する様子がうかがえた。それに対し、妻は過去の夫の不貞について語り、それに現在も強く影響を受けているといえる。具体的には、「彼も結婚してお父さんになったけど、たぶん男性として私が見てるっていうのをもっと感じたいんだろうなっていうのは思うことはあります。別に私じゃなくてもいいのかもしれないですけど。(中略) まだ何か自分をかっこいいまではいかなくても、お父さんとしてじゃなくて、人として魅力的だと思ってくれる人が、私じゃないにしても、そういう女の人にしてほしい、でも、たぶん、私にその気持ち、ないしは、そういう表現がたぶん足りてないんじゃないかなって。だって、私がそれしっかりしてれば、他の人からそういう風に見てほしいって思わないかもしれないですし」と、夫の不貞の原因を自身に強く帰属し、現在もまだ苦悩している様子が示唆された。ID 13 は、幼稚園の送迎等を分担するなど、表面的には夫婦で協力して育児を行っていることがそれぞれの語りからうかがえたものの、情緒的な面での交流がされていない可能性が示された。

虐待不安については、夫は、夫婦関係と同様、「気にしてもしょうがないと思うんですよ、僕は。(中略)全部やってるから、向こう(妻)が。僕が介入する部分がないから、協力してるつもりですけどね」と、妻主導であるために夫は「真剣に考えたことな」く、不安も意識上にのぼらないことが示唆された。一方、妻は、「子どもに対して、本当に結構怒ってしまって、『もうちょっと違う仕方があるんじゃないか』って、きっと(夫が)思っていないかしらって思います」と述べ、自身が育児において夫と比べても他のママ友と比べても子どもに対して異なる接し方であることを全体を通して何度か語った。その上で、各虐待不安項目すべてで得点が高めであることについてその理由を問うと、「何かをしてしまう、暴力とかに関係なく、絶対ってというのが私の中ではないので。何々をしてしまうんじゃないかと思うっていうのに、絶対しないっていう風には思えないし。実際問題、びんたとかぐらいはしちゃうので。(中略)虐待が暴力の、どこからがそう呼ばれるものなのかの、その線引きもちょっとわからなくて。本当に穏やかな、怒ったりとかもせずに済んでる人から見れば、(虐待を)してるぐらいの感じだと思うんです。(中略)どの程度を言うんでしょうね。本当に頭に血が上がったら、通報されてもおかしくないぐらい、怒鳴り散らしたりとかしているの」と語った。ID 13 は、育児への傾倒やそれに伴う反芻の度合いの違いにより、夫婦間で虐待不安に差が生じたといえ、夫は育児についても夫婦関係と同様に回避的な認知をし、不安を感じるに至らないと考えられるが、妻は自身の養育態度が「虐待」に含まれるかどうかも含めよく反芻し、不安を感じていた。また、このような夫婦間差の背景にも、過去の夫の不貞による信頼関係の喪失に伴う夫婦間での情緒的な交流不足があると考えられる。これは、夫婦間のコミュニケーション頻度の認知が一致していない場合、父親の育児参加度の高低にかかわらず、母親の育児不安が高いことを示した先行知見(住田・中田, 1999)と合致する結果だったといえるだろう。

**ID 4 の語り** ID 4 は、夫婦間で子どもへの接し方に違いがあり、それが夫婦関係満足にも虐待不安にも影響を与えていると考えられる。具体的には、夫は、妻の子どもへの接し方を「ちょっと強すぎんじゃないかっていうのがずっと思いがあって」と述べ、それを伝えても妻が納得しないことにある種の無力感さえ抱いていると考えられ、不満として語った。さらにこのような状況の中、夫は「(夫は)怒らない」っていう風に奥さんに言われちゃってます。たぶん怒らないの意味が、認識の差があって。奥さんは怒鳴って叩いて怒るだと思っていて、僕は説明する方も怒るに入ると思ってますよ。怒るっていうか叱るに変えてきたり」と、妻と自分との認識の違いを語った。その上で、夫は子ども

虐待について「**正解がないってわかってるもの、だからこそ、どこまでっていうのが自分でもわからない**」と述べ、「だからあえて高めに(虐待不安の得点を)付けた」と、「子ども虐待」の境界線の曖昧さによる虐待不安の高さを語った。夫は、妻からは「怒らない」と言われる自身の子どもへの接し方が、社会的には「子ども虐待」に該当しないと言い切れないことへの自信のなさを抱いており、それが得点に表れたのではないかと考えられる。

それに対し妻は、泣き声通告をされる経験をし、虐待他者評価不安を強く抱いているが、夫は上記のように妻に子どもへの接し方の違いと無力感からそれについて回避的であるため、ひとりで苦悩していると考えられる。具体的には、「大きい声で(子どもに)『ダメだよ』って言うと、うちって結構道路に面してるので、知らない人が警察に言って『あの家は怒鳴っている。子どもが泣いてる』とかって言われて、お巡りさんが1回来たことがある。(中略)それ以来、危なくっても、**大きい声を出すと、世の中ではそうなるんだなと思っ、それがストレスになってるんです**」と泣き声通告をされた時の経験を語り、それから半年経った「今も全部は消化してない」と述べたが、「(夫には)相談してもまた同じ回答だろうなっていうのもあって」誰にも相談などをせず、ひとりで悩み苦しんでいることを示唆した。

以上より、ID 4 は、夫婦間で子どもへの接し方の違いが、夫婦間の情緒的な交流を妨げているといえるだろう。

#### (4) 総合考察

本研究は、これまで母親のみを対象として検討されてきた虐待不安について、夫婦を対象とした質問紙調査および半構造化面接を行い、夫婦間差や夫婦関係による影響を検討した。質問紙調査の結果から、虐待自己評価不安、虐待他者評価不安ともに妻の方が高かったが、虐待他者評価不安は夫婦間で中程度の正の相関が示された。また、虐待不安と関連する状況や心的状態では、夫は虐待自己評価不安と夫婦関係満足との間に、妻は虐待自己評価不安と自分の家事・育児参加との間に負の相関を示した。面接調査では、質問紙調査の各虐待不安と夫婦関係満足の平均得点の夫婦間差に着目して分析対象とする夫婦を2組抽出した。これらの結果から、本研究では特に興味深い2つの知見を挙げる。

第一に、夫の虐待不安と夫婦関係満足には強い関連が示されたが、それは夫が自身の育児において感じる不安と、夫婦関係において感じる不満に至る過程で同じ認知的処理をしていると考えられるということである。本研究で挙げた2つの事例から、妻にとって夫婦関係は虐待不安の直接的な背景というより、間接的な背景の一つであった。それに対し夫は、2事例とも夫婦関係と虐待不安を同じ認知的処理のもと語っていたといえる。具

体的には、ID 13 は育児についても妻との関係性についても同様に回避的な認知をしており、ID 4 は妻の子どもへの接し方に強く不満を抱くのと同時に自身の子どもの接し方について虐待不安を抱いていた。よって、夫は、それらを別々の認知的処理をする妻と異なり、虐待不安と夫婦関係満足に強い関連を示したのだろう。

第二に、夫婦が抱く虐待不安は、表面的ではなく、情緒的な交流の不足によって助長されるという先行知見（住田・中田，1999）の具体的な事例を示すことができたことである。本研究で挙げた2つの事例は、いずれも表面的には協力し合って育児を行っていた。しかし、ID 13 は夫の不貞、ID 4 は子どもへの接し方の違いが原因で、虐待不安が助長されていた。ID 13 は、妻の方が育児への傾倒や反芻の度合いが高いために虐待不安を抱いていたが、夫とそれについては共有できておらず、夫からも「もうちょっと違う仕方があるんじゃないか」と思われている可能性を危惧していた。ID 4 は、夫の方が子どもへの接し方について虐待不安を抱いていたが、泣き声通告をされるというイレギュラーな経験をすることによって、妻の虐待他者評価不安も高まり、それを夫と共有できていないことによって、より悩み苦しんでいたといえる。よって、一見、協力し合って育児を行い、問題のないように見える夫婦であっても、夫婦関係満足という視点から見て情緒的な交流ができていないかを、支援のひとつの基準とする必要があるだろう。

以上より、夫婦関係満足に着目して夫婦の虐待不安を検討することにより、育児や家族関係の認知的処理の夫婦間での違いや、夫婦の育児における情緒的な交流の重要性が示唆された。

#### （5） 本研究の限界と今後の展望

本研究は、夫婦ペアでの面接調査も実施したため、質問紙調査のサンプルサイズが小さかった。しかし、このような小さいサンプルサイズの中でも、一定の知見が得られたことは意義があるといえるだろう。質問紙調査については、今後、より大規模な調査を実施し、本研究結果の妥当性を検証することによって、知見を頑健なものできると考える。

また、本研究では参加者の自己選択バイアスが生じる可能性があるという問題点も挙げられる。本研究では上述したように夫婦ペアで面接調査にも協力することが参加の条件だった。しかし、仕事をもつ父親、および母親が、休日の限られた時間の中で調査に協力することは容易ではないだろう。そうした中でも本研究に関心を持ち、自発的に参加する夫婦は、ふたりとも育児に対し積極的に関わっている可能性が高く、それに加えて、精神的余裕がある層のみが対象となっていたと考えられる。よって、本研究で得られた知見については、参加者に偏りがあるということ念頭に置いて解釈する必要があるだ

ろう。

今後は以上の問題点を考慮し、より大規模で多様な層の夫婦を対象とした調査を実施し、虐待不安を取り巻く夫婦内のダイナミズムや夫婦間の相違を明らかにし、夫婦を対象として育児支援の提案も求められるだろう。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計1件)

Umemura, T., Watanabe, M., Tazuke, K., Hirano, S., and Kudo, S. (2018). Secure Base Script and Psychological Dysfunction in Japanese Young Adults in the 21<sup>st</sup> Century: Using the Attachment Script Assessment. *Developmental Psychology*, 54(5), 989-998. (査読あり)

〔学会発表〕(計2件)

渡邊 茉奈美 (2017). 虐待不安が母親の育児効力感および育児の質に及ぼす影響：縦断調査の結果から。日本子ども虐待防止学会第23回学術集会ちば大会，幕張メッセ。

渡邊 茉奈美 (2017). 妊娠期から生後24ヶ月までに経産婦が語る虐待不安の変化。日本子育て学会第9回大会，いわき明星大学。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

渡邊 茉奈美 (WATANABE, Manami)

山梨大学・大学院総合研究部・講師

研究者番号：60802874